
とある兄妹の連続転生物語～憑依編～

あいあむウィーゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある兄妹の連続転生物語〜憑依編〜

【Nコード】

N4164Z

【作者名】

あいあむウィーゼル

【あらすじ】

始まりはもう思い出せない。魂が摩耗するほど遠い昔。幾度となく転生人生を繰り返す兄妹が、とある世界の主人公達に憑依する事になった。ある意味最強とも言える彼らは、どんな物語を紡ぐのか。警告：この作品は所謂「最低系」です。また、主人公達が主要人物に憑依するため、ハッキリ言って完全に別人です。そういった話が苦手な方は読むことなく回れ右する事を作者は推奨します。

キャラ紹介（前書き）

ネタ倉庫の「連続転生物語」を読んでない方には、どういう設定か分からないかもしれません。

なので、こっちで簡単にキャラ説明をさせていただきます。

特に物語に大きく影響するわけではないため、こっちを読んでもネタバレになる事は無い、と思います。

キャラ紹介

デフォルト名：風峰陸斗

リクト・カザミネ

生者の兄の方。一人称は「俺」。

基本的に常識人だが、稀にテンションが悪ノリする事があり、そうになるとやり過ぎる事が多い。

玲夜に関しては「兄妹」という関係を超越した絆を持っており、長い転生人生を送る中では肉体関係を結んだ事もあれば、結婚した事もある（当初はあくまで妹だったが、精神が長く生きる中で摩耗してしまったのかもしれない）。

利用できるものは何でも利用するタイプで、自分の容姿が美形なら、それを使って異性を籠絡する事も厭わない。

ISの世界において、何故か死亡してしまった『織斑一夏』に憑依する。

デフォルト名：風峰玲夜

レイヤ・カザミネ

転生者の妹の方。一人称は「私」。

誰にでも丁寧な口調で接するが、陸斗の敵と見なした相手には決して容赦はしない。

基本的にやんちゃをするのが玲夜、諫めるか悪ノリするかなのが陸斗である。

陸斗に対し、元から強い愛情を抱いていたが、転生人生を送る中でそれがさらに強まったのか捻れたのか定かではないが、兄妹や異性では収まらないほどの愛を抱き、それは例え実の兄妹で転生しても厭わないほど。

嫌いな相手は徹底的に磨り潰し、完膚無きまでに絶望させて倒すのが好み。

ISの世界において、偶発的な要因で死亡してしまった『篠ノ之箒』に憑依する。

“彼女”

転生システムの管理人。

当人曰く、「神様であり、死神でもあれば、悪魔でもある」らしい。陸斗達には幼い少女に見えているが、外見は見る人によって千差万別で、「長い髭の老人」に見える人もいれば、「翼の生えた女神様」に見える人もいるとか。そもそも性別があるのかすら不明なので、

“彼女”と形容する事自体間違いなのもかもしれない。

元々の始まりは、世界から弾かれてしまった陸斗達を別の世界へ転生させた事から。人生が終わる度、また別の世界へと転生させている。“彼女”にしてみれば、陸斗達の存在は数少ない娯楽であり、彼らがどう生きるのかを眺めるのが楽しみらしい。

全ての世界を把握しているわけではなく、稀に「激しくカオスな世界」があったり、他の転生者がいたりするのは、“彼女”の責任では無く、「形骸化したシステムの弊害」らしい。

プロローグ：ある意味、これって円環の理？（前書き）

以前、活動報告でお知らせした通り、投稿してみる事にしました。

と言うのも、ずっと同じ話を書いているとスランプになってしまふので、たまにはこういう最低系なお話を書いて気分転換でもしてみようかな〜と。

改めてもう一度言っておきますが、これは主要人物に2人の兄妹が憑依する話です。そのため原作の2人はほとんど登場しません。さらに言うところには「最低系」と呼ばれるジャンルです。

多作品のネタはありますし、ハーレムっぽくなるかもしれませんが、さらに言うところ最強になるかもです。

そういった表現が苦手な方は、スクロールする事無くウィンドウを閉じる事を推奨します。

それでも読みたいという方は画面をスクロールしていただいて結構です。転生兄妹の憑依人生をお楽しみください。

プロローグ：ある意味、これって円環の理？

「罰ゲームです」

「「は？」」

通算……何回目かは忘れたが、もう確実に千年は超えてるだろう
転生人生を送っている俺たち兄妹。

前回の世界、コズミック・イラの太陽系こと『機動戦士ガンダムS
EED』の世界の人生を終えて、再びここへと戻って来ていた。

戻って来た俺たちを出迎えたのは……怒り心頭という様子の“彼
女”。

お説教が始まった。

「あなた達やり過ぎなんですよ！ やり過ぎたらこっちで調整する
のが大変だっていつも言ってますよね！？」

「いや、つい………すまん」

「すまんて済むと思わないでください！！」

とりあえず謝るが、涙目でそう怒鳴る“彼女”。

ぶつちやけ怖くないし、可愛いとしか思えない。

「……………元はと言えば、あなたが物騒な世界にばかり転生させるからでしょう?」

どこか諦めたように、玲夜がそう呟く。

まあ、ガンダム関連は全部戦争だしな。大規模ビームだったり、コロニーに毒ガスだったり、コロニー落としだったり、核ミサイル撃ち込まれたり、金属生命体襲来だったり……………物騒な事しか思い浮かばない。

「仕方ないじゃないですか。……………その方が楽ですし、面白いですし」

「ぶつちやけた!? ぶつちやけてるぞ、おい! しかもその理由なんだよ、最低だな!」

「つまらない仕事ばかりしてる私の唯一の娯楽なんです! それにあなた達だって途中からノリノリだったじゃないですか! 何太陽炉なんて作ってるんです!? どれだけバランスブレイクだと思ってるんですか!？」

「作ったのは俺じゃないぞ、イオリア・シュヘンベルグだ」

てか、何でコズミック・イラにイオリアがいて、太陽光発電システ

ムの論文があるんだよ。

何で「乙女座でセンチメンタリズムな武士仮面」とか、「不死身の炭酸飲料」とか、「露西亞の穴熊」なあの軍人がいるんだよ。

家系図やテレビ見て、見知った名前がいくつかあって思わず噴いたぞ。

「……………いや、あれは私も想定外だったかなと。たまにあるんですよ、変にクロスした世界」

ああ、それはよく知ってる。

確かに前に経験したカオスと比べれば、今回はまだマシだったと思う。

大分前だが、「けいおん」や「らきすた」などの平穩その物が混ざり（これだけなら問題無い）、さらに「スーパー戦隊」や「仮面ライダー」が混ざった（明らかにこの辺はおかしい）カオスな世界に転生した事があった。

……………その時の事は衝撃的すぎて、思い出せるが思い出したくない。記憶の底に沈めておきたい。

ただ1つ言えるのは、もう二度とあんな世界はご免だ。

「それはさておき……………あなた達やり過ぎなんですよ!」

否定出来ない。

さすがにダモクレスはやり過ぎたかな〜って思っていたが……………うん、反省はしている。

いや、実際に使うつもりは無かったんだよ。あくまで抑止力、脅しのための道具であって、フレイヤを撃つつもりは無かった。

……………まさか、内部でジャスティス核爆発させて、その連鎖反応で恐ろしい事になるとは……………。

だって普通にそんな事しないだろ！？ 何でよりによって核爆発なんだよ！

「だからって何でダモクレスなんです！ せめてメメントモリにしないよー！」

「そっちかよー!!」

あれは……………一応考えたが、軌道エレベーターが無かったらダメだし。

「まあ、その辺にしておきましょう。何なんです、罰ゲームって」

「いえ罰ゲームという程ではないんですが、とりあえず厄介な仕事

をお願いしようかと」

「は？」

「ぶつちやけると、想定外の事態が発生して1つの世界が壊れそうなので、お二人に修復してもらいます」

……嫌な予感しかない。

「率直に言うてください。何をしろって言うんです」

「ぶつちやけると、「インフィニット・ストラトス」で、とある主要人物が死んでしまったので埋め合わせに憑依してください」

ああ、そう言う事が。

転生の別物として『憑依』というものがある。

転生だとその世界の住民として最初から生まれ落ちる事なのだが、憑依だと世界の住民に魂の状態でくっついて、その人物になる事を意味している。

もちろん、身体を乗っ取る事と同義なので、俺たちとしては罪悪感のような物を感じた事があった。最初の方は抵抗感もあったし。

……だが、もう何百年も転生したりしてきたので、もうそんな感情はほとんど湧いてこなくなってしまうた。やはり魂が摩耗してい

るという事なのかもしれない。

それでも特定人物に憑依するという事は、ある意味最初からフラグが建ってるようなものなので、出来る事なら憑依は避けたいものだ。例えば主人公に憑依だと、死亡フラグやその他諸々のフラグが建ってしまう。主要人物以外でも、変に死亡フラグが建ってるキャラに憑依してしまい、酷く厄介な事件が起きた事もあった。

具体的に言うと、「なのは」でだな。俺、高町なのはに憑依したんだぞ？ あり得ないだろ。

あの時の話はしたくない。出来れば思い出したくもない。女になるなんて二度とご免だ。

「で、誰に憑依するんだ？」

「それは、憑依してからの楽しみで」

………この時、すっかり聞き出しておけば余計な混乱は無かったのかもしれない。

「っ……………」

頭が痛む。

ぼやける視界が、徐々に広がっていく。

視界に飛び込んでくるのは、白い部屋。どうやらベッドに寝かされていたらしいが、ここは……………。

「病院、か？」

男の声だ。女に憑依しなかった事を内心喜びつつ、周囲を見渡す。

どうやら病院の……………それも個室らしい。

痛む頭に手を当てると、何かが巻かれている。これは……………包帯？

「アイツが言ってた「死んだ」っていうのはこういう事なのか……………」

…」

何かしらの怪我を負い、それで死んでしまった。

さすがにそのまま放置は出来ないの、代わりに俺を突っ込む事で安定させてるというところだろう。

……で、俺はいつたい誰なんだ？

「インフィニット・ストラトス、だったよな」

ちょっと待て。

今思い出してみたが、あれには男性が恐ろしく少なかった気がする。

俺は男に憑依出来た事を喜んでいたが、これってある意味フラグなんじゃ……………。

「まさか……………」

嫌な予感がしつつも、鏡を探す。

部屋に備え付けの鏡を見つけ、中を覗き込んで……………後悔した。

「よりによって織斑一夏（じま）かよ、コンチクショウー!!」

思いつきり吠えた。

よりによって何で織斑一夏なんだよ！　せめて五反田弾とかならまだ平穩だったよ！

……………まあ、確かに織斑一夏が死んでしまえばとんでもない事になる。てか、主人公がいない物語は完璧破綻するし。

この分だと、玲夜はヒロインの誰かに憑依していそうだな。

「……………とりあえず、これまでの事を思い出してみるか」

俺はもう既に織斑一夏なので、その記憶はある。

えっと……………まだIS学園に入る前だな。今はまだ中学生か。

第2回モンド・グロツソに千冬姉の応援に来て、会場へ向かう途中、見知らぬ女性にいきなり気絶させられてどこかの廃工場へ連れて行かれた。

……………で、何か言い争いのような物を聞いたが、その直後銃声が聞こえると同時に意識が……………。

(よく分からないが、仲間割れでも起きたらしいな)

そこで織斑一夏は死んでしまい、代わりに俺が突っ込まれた……と。しかし、何でこんなイレギュラーが発生したんだ？ よく憶えてないが、特に怪我はせずに助けられるはずじゃ……。

(……………転生者でもいるのか?)

2番目に嫌なパターンとして、自分達以外のイレギュラー……………他の“転生者”の存在がある。

まあ、無害な奴もいるんだが、たま〜に厄介な奴もいたりする。

画面の向こうの君たちは「俺TUEEEEEEEEEするハーレム好きな最低系転生者」だと思ってるみたいだが、まあそれも厄介だが、それ以上に厄介なのは「全てを幸せにしたい」と考える奴だ。

『無能な働き者。これは処刑するしかない』という言葉がある。

原作通りに進めようとするならまだいい。だが、なまじ不幸なキャラがいて、それを幸せにしようと改変する奴こそ、厄介極まりない。

……………かなり昔の話しよう。俺たちがそんな転生者の所為で、極めて多大な被害を被った時の話を。

2回目か3回目の『リリカルなのは』だった。そいつはアリシア・テストロッサの事故死を食い止め、テストロッサ家と幸せな未来を

築こうとした。

しかし、それが何を意味しているか分かるか？

アリシアが死なない「フェイト・テストロッサが誕生しない事を意味している。

すなわち、原作が始まる前から破綻してしまっているのだ。

もちろんジュエルシード事件については、平和的に解決はした。

運搬船は原因不明の事故を起こし、運命通りにジュエルシードはバラまかれた。

……ただ問題だったのはそこからだ。具体的に言うと、闇の書事件やJS事件。

フェイトがいない、すなわち戦力が低下する。原作だとシグナムと戦ってたが、彼女ケいないのでシグナムを食い止める人間がいない。

フェイトがいないので、その使い魔たるアルフも存在していない。ぶっちゃけザフィーラも止まらない。1人くらいならクロノが何とか出来るが、さすがに2人は辛い。

仕方なく、俺たちが出張る事になり、最終的に六課まで頑張る事になった。

さらに言うのだが、プレシア・テストロッサが完成させるはずだった「プロジェクトF」についても完成される事なく、そのためその技術を用いて誕生するはずだった生命は生まれる事が無い。

すなわち、エリオ・モンディアルは誕生しなかったのだ。

……なお、戦力ダウンのために俺たちが苦勞したことは言うまでもない。

だって、どちらも『世界終了のお知らせ』級にヤバイ事件だぞ！？
ほっといたら平穩とはほど遠くなるぞ！？

「……………いないと、いいなあ」

私、風峰玲夜が『篠ノ之箒』に憑依してから10年ちよつとが経とうとしている。

色々あった。ええ、色々あったんですよ。

箒が篠ノ之束を嫌うのも分かる。あのテンションはウザ過ぎです。少し離れて接するならともかく、常時アレはキツイ（ちょっと邪険にあしらうと、この世の終わりの如き状態に陥り、首を吊ろうとするので大変だった）。

「ふう……………」

素振りを終え、竹刀を傍らにおいて一息入れる。

憑依してからは出来る限り、篠ノ之箒らしい言動と行動を心掛けている。一応、彼女の記憶と人格については完全に理解しているので、「こういっ道を進むんじゃないか」という感じですよ。

剣道が続けているのもその1つ。……………少しやり過ぎて、全国三連覇とかやっちゃいましたけど、特に問題無いですよ？

それはともかくとして、やっぱり高校はIS学園に進学する事になりそうです。

まあ、私がそっちに進むのは『監視』と『保護』という名目が大きい。

何せ、ISを開発した篠ノ之束の実の妹であり、政府側としても監視する必要がある。

同様に両親もそのような扱いを受けているわけなのだが、特に私の

場合、姉が溺愛する数少ない相手であり、篠ノ之束の掌握を目論む人間からしてみれば、十分に狙われる要因ともなる対象となる。

ISの生みの親である彼女が特定の団体に力を貸せば、間違いなく勢力が傾く。だからこそ、私は特に監視と保護が強化されているわけなんですが……………。

「篠ノ之さん、大変よ!!」

と、飛び込んで来たのは同じ剣道部の同級生。

胴衣のまま、その手にはポータブルテレビが握られている。

「ほら！ 世界初の男性IS操縦者だって!」

「ん?」

画面には、すっごく微妙そうに強ばった表情の織斑一夏の姿があった。

……………うわー、やっぱりこうなっちゃったんですね、兄さん。

プロローグ：ある意味、これって円環の理？（後書き）

何百年も転生人生を送ってきて、何で他の世界のことを憶えているのか。

もしかしたらこう思う人もいるかもしれませんが。

「嫌な出来事」って、妙に印象強く思い出に残ってたりしません？

例えば、恥をかいたり、ショックを受けたり、そういった嫌な記憶が鮮明に残ってたり………しません？

私が自分の具体例を挙げるとですが、小学生の頃に「新撰組の隊員で誰を知ってますか？」と先生に聞かれ、迷わず「斉藤」と答えたら「るろうに剣心だろ」と笑われた事があります（実在の人物ですが、やっぱり子供としてはそっちの方が印象強いらしく、かなり恥ずかしい想いをしました）。今でも忘れられません。

そのため、陸斗達にとって「激しく嫌な思い」をした出来事について、憶えていたくないのに憶えていてしまいます。

「ガンダムSEED」にOO成分が混ざった世界は………まあ、まだマシです。ただ、激しくカオスな世界に関しては、衝撃度が強すぎて忘れられない。そんな感じですよ。

彼らが体験した世界については、ネタ倉庫にあるものもそうですが、要望があればもしかしたら番外編という形で書き下ろすかもしれません。

第1話：一夏君が木刀を振るう。ただそれだけの話（前書き）

今回、ネタが多数あります。ご注意ください。

第1話：一夏君が木刀を振るう。ただそれだけの話

「ぐはっ！」

木刀を振るい、前方の不良を吹き飛ばす。

まだそこまで筋力は付いていないため、今の一撃程度ではせいぜい骨折もしていないだろう。

……だが、大分勘も戻ってきたな。

「乙女座の私では、センチメンタリズムを感じずにはいられないな」

……ま、9月27日生まれだから天秤座だけだな。

「な、何なんだよこの変態は!!！」

む、失礼な連中だ。

そう言えば自己紹介……というか、名乗りを上げていなかった気がする。

「ならば敢えて言わせてもらおう。武士仮面であると!!！」

「『名乗ってねえ!!』」

何を言う。この仮面が目に入らぬか。

前の世界の時、正式に「ミスター・ブシドー」の名前と仮面を、俺は正式に譲り受けた（本人曰く「勝手にそう呼ぶ」から、押しつけられたに近いのだが）。

……まあとりあえずお前ら、倒される。

「っざけてんじゃねえっ!!」

鉄パイプやらチェーンやら木刀を握り、不良共が俺へと迫る。

確かに数だけなら驚異的だ。普通に十数人相手にするなら、結構手間がかかる。

だが、だからこそ訓練になる。

振り下ろされる鉄パイプを、木刀で横へと弾き、腹に蹴りをお見舞いする。

そのまま振り返り様に、背後にいた不良へ横薙ぎに木刀を叩き込み、再び構えを取る。

「こ、このガキ……………強え！」

「どれほどの戦力差であろうと、今日の私は阿修羅すら凌駕する存在だ！！」

……………なあ、一夏。

「どうした、弾？」

「これ、お前の仕業だろ」

そう、隣の席に座る親友に、週刊誌を見せる。

その見出しには『敢東連合壊滅！？ 謎の戦士、ミスター・ブシド

「とは？」

「ご丁寧にも、そこには陣羽織っぽい服装に、武者っぽい仮面を装着した一夏らしき人物の写真が載っている。」

「……………その足下に、積み重なった不良達がいるのなんて、俺には見えない。」

「何の話だ？」

「いや、これ明らかにお前だろ！？」

「確かに顔は隠れてるけど、髪型とか顔の輪郭とか目とか、確実にコイツとしか思えない。」

「てか、何だよミスター・ブシドーって！？」

「武士仮面は武士仮面だろ？ 俺は知らん」

「……………お前、向こうから帰ってきて性格変わったよな」

「何でもコイツ、モンド・グロツソに千冬さんの応援に行って、誘拐されて頭撃たれたとか。」

「ワイドショーでそれ見て、飲んでた茶噴き出したぞ。蘭なんてショクで倒れるし……………」

鈴も今すぐ飛行機に飛び乗ろうとして、アイツの両親が必死に止めてたくらいだ。

で、そのワイドショーから2週間くらい経って戻って来たんだが……別人と言ってもおかしくないくらい変貌していた。

「ねえねえ織斑君、昨日のノート見せて貰ってもいい？」

「ああ、いいよ。ほら」

「ありがとう」

……いや、コイツは元からモテてはいた。

家事は万能でスポーツもそれなりに出来る。おまけに顔もかなりイケメン。

自分を中心にした恋愛事に対し、超絶的なほどに鈍感さ（人呼んでキングオブニブチン）を除けば、「このリア充が！」と叫びたい。

これまでもクラスの女子はもちろん、鈴や蘭からもそれなりにアプローチを受けていたが、見てるこっちが不憫になってしまっただけにスルーしていた。

去年のバレンタインも、幾つも本命チョコ貰っておきながら、「食べきれないから」と言う理由でクラスの男子に配っており、タコ殴りにしたのは記憶に新しい（蘭が気合入れて作ったのもその中に入

っており、その時の俺は殺意の波動に目覚めたかもしれない。

それが今ではこの通り……行為自体は前と変わらないが、接し方がより洗練されたものになっている。

(……………コイツ、本当に一夏か?)

本当は誘拐された時に入れ替わったんじゃないか?

……………いや、もしそうなら千冬さんが即座に斬り捨ててるな。

織斑一夏は基本的に美男子である。

先ほども五反田弾が評価したように、家事は万能、顔立ちも整って

いるし、運動能力だって高い（しかも現在進行形で成長中）。

ただ、彼の最大にして最悪の欠点とも言うべきが、色恋絡みに関する鈍感さである。

「付き合って！」と言えば、「（買物に）付き合えばいいんだな？」

「好き！」と言えば「（友達して）俺も好きだぞ」

そのため、これまで不憫すぎるほどのスルーっぷりを発揮し、フラれていった女子の数は数え知れない……。

（せっかくのイケメンスペックなんだし、もっと有意義に使わないとな）

だが今回、中の人が違う。

なかのひと
風峰陸斗は長い人生を経験してきたため、人の心の動きにはそれなりに機敏であり、本来の織斑一夏ほど鈍感じゃあない（一緒にされる方が迷惑だ）。

陸斗は基本的に、自分に備わったものは何でも武器にしようとする。容姿が女性受けするのなら、それを有効活用し、女性を籠絡する事も厭わない。

今日はちょっとした用事があり、カジュアルな服装で固めて街へと

乗り出し、一夏は喫茶店で一息ついていると……………。

「……………あ、あの」

振り向くと、そこには何人かの少女の姿が。

自分とそう変わらない年頃だろう。ショッピングにでも来たのか、手には紙袋が提げられている。

「よかったら、一緒にお茶しませんか？」

少し緊張したように、少女がそう訪ねてくる。

一方の一夏だが、微笑を浮かべつつも冷静に少女達を見定めていた。なかなかの美少女だ。先約さえ無ければ、このままデートにしゃれ込んで悪くはない。

「悪いが、今日は待ち合わせをしていな」

「そ、そうですか……………」

「また今度、時間が空いている時に誘ってほしいな」

ちよつと残念そうに立ち去っていく少女達。

そんな彼女達と入れ替わるようにして、1人の少女が喫茶店へと入り、一夏の正面の席に座る。

「……………随分と軟派なんですね。私、お邪魔でしたか？」

「おいおい、その口調は少しマズくないか？」

「心配ありません。監視はしませんし、それにあなたと接する時から素に戻らせてください」

……………普通、敬語は素で使うものじゃないんだがな。

ま、どうでもいいか。久しぶりだな、れいちゃ 篤。

「ええ、お久しぶりです。一夏にいさん」

きっかけは、一通のファンレターだった。

差出人の名前は『風峰陸斗』。

内容はそこまでおかしなものではなく、ごく普通のファンレター。

もし、篠ノ之箒が本来のままだったら、単なるファンからだと思い、そう気にも留めないだろう。

しかし、篠ノ之箒が私だったからこそ、このファンレターは特別な意味を持つ。

その住所へ一通の手紙を出す。名前は篠ノ之箒ではなく、『風峰玲夜』で。

……数日後、再び『篠ノ之箒』宛てに手紙が届く。今度は『織斑一夏』の名前で。

「まさか、ああいう頭脳プレイで来るとは思いませんでしたよ」

「仕方ないだろ？ もしお前が篠ノ之箒じゃなかったら、余計に混乱する事になる。いくらでも慎重になるさ」

モ力を飲みながら、そう答える一夏。

まあ、もし筭だったら間違いなく混乱するでしょうね。いきなり意中の相手から手紙が来たわけですし。

それが今後、どんな影響を与えるか分からない。小さな出来事が大きな影響を引き起こす事を、私たちは身を以て体験してきたのだから。

「では、私が篠ノ之筭で無かったらどうするつもりだったんです？」

「やっぱり、その時が来るまで待つしか無かっただろうな」

そりゃあ、そうですねえ。

主要人物なのだから、やはり原作が始まる時期にならなければ会う事が叶わない相手だっているはず。

もちろん、それなりの立場にいて、時間がある人間なら接触する方法があるかもしれないが……。

「そう言えば、お前はいつから憑依してたんだ？」

「8年ぐらい前ですね。イレギュラーと言っても、こっちは単に事故に遭っただけですよ」

事故で頭を強打して、奇跡的に助かった……という事になってます。少なくとも、この辺りに誰かしらの意図は見られませんでしたが、単なる偶然と判断してもいいでしょう。

そっちは……例の誘拐ですか？

「ああ。頭撃たれてお陀仏になりかけてた。仲間割れか知らんが、こっちにはイレギュラーがありそうで嫌になってくる」

揃って苦い顔になりつつも、ケーキを口に運ぶ。

1番嫌なパターンとして、転生者が関わってる事。

下手に干渉して、それで厄介な事になる。それも経験した事があるので、頭が痛くなってくる。

篠ノ之箒の記憶の中だと……それらしき影はいませんね、多分。

「今のところ、こつちもな。……だが、警戒は怠らない方がいい。お前もしつかり『篠ノ之箒』でいてくれ」

「分かっている。お前こそ、変な真似はするんじゃないぞ」

もう何年も猫被ってますし、これくらいは容易いですよ。

姉さんしののたはですら、私の猫かぶりは見抜けていません。伊達に何千年も転生者やってませんかからね。

「ただいま」

と言っても、家には誰もいない。

千冬姉はドイツだし、合鍵を持つてる人間はいない。

……千冬姉と言えば、誘拐事件以後何だかよそよそしい。憑依には気づかれてないと思うが、やはりどこか織斑一夏とは違う部分を感じているのかもしれない。

まあ、その辺りは時間が解決するだろう。ドイツから戻ってきてからの話だ。

「それまでにいくつか調べておかないとな……………」

まず調べるべき事は、俺たち以外のイレギュラー……………転生者が存在していないかどうか。

形骸化したシステムの残滓が、ごく稀に転生者を送り込む事がある。

世界や俺たちにとって有害になるのであれば排除する。無害ならば放置する。

筈との会話でも言っていたが、今現在までそれらしき人物は俺の記憶の中には存在していない。

巧妙にそれを隠しているのかもしれないが、もしそうならちょっとばかり厄介な相手になる。

「まずはググってみるか」

この世界に「あり得ない」事が起きていたら、基本的に転生者の作業だ。……………まあ、カオスな世界のように世界観を混ぜ込む事はさすがに出来ないと思うが。

パソコンを立ち上げて、インターネットに接続。検索エンジン呼びだしてっ……………。

「……………物騒な事件が起きてるもんだな」

検索エンジンに掲載されていたニュースが目飛び込んでくる。

つい先日、自分の身に起きた事件を棚に上げて、そう呟く。

何でもどこかの国の代表がモンド・グロツソの個人競技において、相手に過剰な攻撃を加え、反則スレスレで勝利を掴んだ事が問題視され、この前まで協議されていたというニュース。

元々その代表はかなり問題のある性格らしく、他にも問題を起こしているとか起こしていないとか……………お、すごい美人。鈴が見たら確実に羨むだろうな……………。

「つとと、いかんいかん」

余計な事に気を取られてしまった。

しかし、何をキーワードにすべきだろうか。

まあ、適当に俺が生まれたであろう時期に、何かしらの事件が起きなかつたか調べてみよう。

「……………おお、出てくる出てくる」

その中でも目を引いたのが、「親が子供を殺す」という事件。

遺伝上、生まれるはずのない形質を持った子供が生まれてきたために、夫が妻の浮気を疑い、子供諸共殺害するという事件だ。

……そりゃあ、純日本人なのに金髪に碧い瞳とかだったら怪しむって。

他にも、子供の異常死が多数報告されている。

それでも生き残った人間がいるらしく、分かりやすく言うなら「ふるいにかけられて、残った」という事なんだろう。

「エルトナ・ハーミット、か」

13歳にして、フランスの代表候補生を務める彼女は、国家代表に最も近い存在だとされているらしい。

自身で製作した専用機「ラファール・リバイバル」を駆る姿は「聖少女」と呼ばれているとか。

……え？ 何で気づけたかって？

そりゃあ気づくって。見た目が某歌姫と瓜二つだし、動画の発言がネタ塗れだし。

「敵対さえしなければ、大丈夫だろ」

そう、その時はまだ楽天的に考えていた。

第2話：イレギュラーは知らぬ間にいなくなる

エルトナ・ハーミットは転生者だ

前世で死んでしまった彼女は、何の因果かこの「インフィニット・ストラトス」の世界へと転生を果たした。

生まれはフランス。両親はデュノア社に務める研究員。

彼女は幸い、あらゆる能力に秀でていた。特典なのかどうか分からないが、IS適正値はS。

第2世代の「ラファール・リヴァイヴ」を改造して、自分の専用機を作り上げる事が出来た。

彼女の實力を認められ、代表候補生に選抜もされた。

あたしは主人公だ。この世界に舞い降りた、オリ主だ。

……そう、ついさっきまではそう思っていた。

「な、何なのよアイツは!?!」

絶対的な恐怖。

今のエルトナを支配しているのは、それだった。

震える身体をどうにか抑え込み、相手を見据える。

……上空から彼女を見下すその女性は、ただ嗤っていた。

「あらあ？ 私に最も近いって聴いてたんだけど、この程度？」

リフィリス・シャミナード。通称“シスターリフィリス”。

艶やかな銀色の髪に金色の瞳を持ったその女性は、現フランスの国家代表だ。

IS関連において、篠ノ之束や“ブリュンヒルデ”織斑千冬に次いで名の通った存在。

第2回モンド・グロツソでは個人戦を始めとする各種競技で優勝に輝いたが、ある問題を起こした事で総合優勝の座にはあがれずにいる。

「この、殺人狂……ッ！」

エルトナが震える声でそう叫ぶ。

シスターと呼ばれてはいるが、彼女は実際に聖職者ではない。

ある事件によって彼女は聖職者としての道を歩めなくなったのだが……その経緯はおいおい語る事にしよう。

彼女が総合優勝出来なかった理由。それは彼女の性格に問題があったからだ。

殺人狂。先ほどエルトナがそう呼んだように、リフィリスは他者を殺す事で快楽を得ようとする異端の存在。

これまで公式の試合では、絶対防御をも撃ち抜く過剰な攻撃を加え、流血沙汰にまで発展するケースが多々ある。……表沙汰にはなっていないが、非公式の試合では相手を死に至らしめた事もあるという。

それだけの問題行為を行っていないながら、何故相応の処罰が下らないのか？

それは彼女が、その欠点さえ除けば極めて優秀なIS操縦者だからである。

「つまらないつまらない、もう一つおまけにつまらない」

ひどく愉快そうに、リフィリスは嗤う。

激昂したエルトナはリフィリスに向けて、右手のマシニングンを放つ。

無数の銃弾は正確に対象と向けられているが、対するリフィリスはわずかに重心をずらす事で、必要最低限の動きで攻撃を躲す。

格の違い。レベルの差。

こうなったのは全て、エルトナの自意識過剰からである。

確かに彼女は強い。才能もある。国家代表に最も近いとも言われている。それが彼女を天狗にしてしまった。

「あれだけ啖呵を切っておきながら、こおんなに雑魚なんてつまらない」

「う、うるさいっ!!」

ただ引き金を引き、マシンガンを乱射する。

激昂するままに銃弾は放たれる。狙いなどつけられておらず、かえって回避は難しい。だが一切被弾しない。

何故当たらない。

エルトナの頭の中には焦りが生まれている。

恐怖と焦り。それは判断力を鈍らせる。

瞬間、赤い液体がアリーナに散った。

「っあ、あああああああああああああああああああああ
!?????」

理解するよりも激痛が早い。

マシンガンを握っていたエルトナの右腕が、“ラファール・リバイバル”の右腕部と共に切断されたのだ。

あり得ない。シールドエネルギーはまだ尽きていない。絶対防御も正常に作動している。

なのに、腕が斬られた。操縦者に傷を負わせた。何故？

「あらあ？　うるさかったから斬っちゃった」

きよとんとしたように呟くりフィリスの手には、片刃剣が握られており、その白い刀身は鈍く輝いている。

リフィリスの専用機、第3世代IS“アズール・ゼフィーレ”。その固有武装『デュランダル』。

アズールには基本的に、それ以外の武装は無い。状況に応じて切り替える事はあるが、彼女はデュランダルによる近接戦闘を好んでいる。

「ん……………」

「ひっ…」

ゆっくりと近づいてくるリフィリスに、エルトナは後ずさる。

あまりにもリアルな死の恐怖。

逃げられるはずがない。それでも、彼女は後ずさる。

迫り来る死の宣告を、少しでも後送りにしようと。

「じゃあね」

にっこり微笑んだリフィリスの顔。

それがエルトナの見た最後の光景だった。

「……………」

後輩の山田君からかかってきた連絡に、私は頭を抱えていた。

リフィリス・シャミナードがまた問題を起こしたらしい。

第2回モンド・グロツソにおいて、決勝で私と戦えなかった憂さ晴らしなのか、他の競技で敵をISが完全破壊されるギリギリのところまで鬨っている。

實力だけならば、私と同等……………否、私をも上回るかもしれない。

非公式の試合で戦った時はギリギリで勝てたが、もう2度と戦いたくない相手だ。

「それでその、エルトナ・ハーミットだったか？ その候補生はどうなったんだ？」

『右腕を切断された上、肩から脇腹にかけてバツサリ斬られたそうですが、どうにか一命だけは取り留めた。ただ、操縦者として復帰出来るかは……………』

「……………そうか」

それでもシャミナードと戦って、その程度で済んだのなら運がいい。

あれはただ戦いだけを求めている。モンド・グロツソのような「スポーツ」としての戦いではなく、戦場に存在する血みどろの戦い。純粋な命のやり取りを奴は求め、その結果、相手を死に至らしめる。至らしめなくとも再起不能レベルの重症を負わせる。……だから殺人狂などと呼ばれているのだろうか。

奴を非難する者は多いが、意外にも支持する者も多い。

シャミナードの支持者は主に軍人や武術家だ。それも男女関係無く、本物の戦いを知っている者から支持を受けている。

『それはそうと、そっちはどうですか？』

「まあまあだ。さすがは軍人、教え甲斐がある」

少しくらい無茶をしても乗り越えてくるのだからな。

日本…… IS学園ではこうもいかない。指導方針が委員会によって定められているため、私の考えた指導法は適用できない。

『あんまり無茶しないでくださいよ？ 一夏君も心配してましたし

……』

「……………ちょっと待て。今なんと言った？」

今、非常に気になる人名が聞こえたぞ。

『先輩の弟の織斑一夏君ですよ。この前、街に出かけたらたまたま会って、お茶に誘われたのでお言葉に甘えちゃいました』

「そ、そうか」

た、確かに山田君と私が写っている写真は部屋にあるし、それを一夏が憶えていたのかもしれない。

……それにしても、あの事件以降、一夏の雰囲気さがらりと変わった。

これまでの一夏の優しいそれとは違い、意識を取り戻してからの一夏は、

と言うより、女を茶に誘うだと？ あれにそこまでの甲斐性があったか？ 異性からの好意に果てしないほどに鈍い野暮天に。

『先輩の事、心配してましたよ？ 「姉の事、よろしく願いします」って、すつごく礼儀正しくて優しい子でしたね』

電話口からは、やたら一夏をべた褒めする山田君の声が聞こえる。

……あり得ない。いや山田君じゃない、一夏だ（山田君が妄想混

じりになってしまふのはいつもの事だ)。

目上の相手には相応の態度は取るだろうが、山田君がここまでべた褒めするという事は、それなりのエスコートをしたのだと想像出来る。

自慢じゃないが、我が弟はそこまで男として完成されていない。その辺りはバレンタインの一件でも分かるはず(話を聞いた時はさすがに不憫すぎて、思わず叩き斬ってやろうかと思った)。

思春期なのだから、価値観が変わる事くらいあり得るが……………。

『え、でも私年下は経験なくて……………それで言ったら男の人とお付き合いした事もほとんどないですけど、やっぱりお姉さんだから私が出来るだけエスコート……………ううん、がつつり来るのを優しく抱きしめて包容力を……………』

……………ああ、分かっている。そろそろ山田君を止める事にしよう。

これ以上放置しておく、— 18歳未満お断りの世界《ノクターン行き》になりそうだからな。

「山田君、そろそろ戻ってこい」

『……………ハッ!?!』

そういう事は個人の趣味だが、当人と話してる最中にその弟を妄想のはけ口にするのは如何なものかと思う。

正直、引く。

肉体的な能力……例えば戦闘技能についてはまだまだだ。

実戦で勘を取り戻そうとしているが、前の世界が世界なだけに、イマイチ取り戻せそうにない。

生身で戦ってた世界ならともかく、MS乗ってやってたからな……
…生身でやり合う事はほとんど無かったし。

だが精神的な能力……魂として憶えている経験は十分に生かす事が出来る。

具体的に言つと、「け」で始まって「ば」で終わるお金を稼ぐ方法とかそーゆー事だ。

「すげーな、坊主！ これで5連勝だぞ!？」

ちょっと汚い身なりのおっさんが、そう言つて俺の肩を叩く。

もちろん、まだ中学生の俺が馬券を買う事は出来ない。

未成年が公営ギャンブルをする事は法律で禁止されており、競馬場に入る事は出来ても馬券を買う事は出来ない。せいぜいレースを見たり、予想したりするくらいだ。

今回、かなり追い詰められてそんな男を捜し、適当にレースの予想を教え、的中率の高さを実証する。その後で取り分の交渉をして金を稼ぐ……と。

後はちょっと活躍すれば、他の連中も次第に予想を聞きに来る。

これでも生き物に関する知識は凄いぞ？ 野生児同様の生活をした事もあったり、グルメ界にだって入った事もあった（思えば、純粋に楽しいと思つたのはあの時だけかもしれない）。

どの馬の調子がいいか、どの馬が勝つとか、そーゆーのはしっかり分かる。……この辺りはトリコに感謝だな。

（まあ、千冬姉にバレたら殴られるだろうけど）

「未成年が競馬だと？ 何を馬鹿な事をしている！！」と鉄拳でも飛んできそうだ。

なので、ドイツにいる今が稼ぎ時。帰ってきてからは別の方法を考えなければならぬ。

とりあえず、アレだ。バレなければいい。稼いだ金については、俺が家計簿を握っているから隠し通せる。もしバレても「宝くじを買ったら当たった」とでも言えればいい。あの人は基本脳筋だから、そこまで詳しく知ってるわけじゃないし。

（金があつて困る事はない。裏の世界に関わるには、今稼いだ分じや到底足りない）

裏の世界は基本的にギブアンドテイク。金さえあれば大概のものは手に入る。

さすがにISOコアは手に入らないだろうが、試作段階で廃棄されたパーツやら、面白いものが見つかる事がある。

道具はもちろん情報もそうだ。情報は何よりも勝る武器。情報を制する者こそが、現代を生き抜く事が出来る。

さすがに裏の賭博だと、その道のプロがいるため（一応こつちも“手品”は出来ない事は無いが、やはり玄人には劣る）にリスクが大きすぎるが、競馬や競輪のような公営賭博ならば、完全に公平。

「君、こっちも予想して貰ってもいいかな？」

「はい」

さてと、今日のノルマは稼がないとな。

番外編：玲夜ちゃんのヒロイン攻略表（IS編）（前書き）

最初に謝っておきます。（色んな人に対して）ごめんなさい。
これはお遊び以外の何物でもありません。ただ思いつくままに書き
綴りました。

最初は、玲夜が長い転生人生の中、「どうせだから遊んでみませんか？」と陸斗に話を持ちかけたところから始まる、「ヒロインをNTR」なIFっぽいSSを書くころと思っていたんですが。
何をどう間違えたのか、こんな物を書いてしまいました。

生暖かい視線でもってお楽しみください。

番外編：玲夜ちゃんのヒロイン攻略表（IS編）

玲夜ちゃんのヒロイン攻略講座（IS編）

篠ノ之箒：難易度：中

ワンサマー君の鈍感さとデリカシーの無さに、最もヤキモキしてる人です。

まずは、ワンサマー君にどうやって振り向いてもらえたらいいかという彼女の相談に乗りましょう。真摯に対応すれば彼女の好感を得る事が出来ます。

「一夏と私」で、ワンサマー君の鈍感さに悩んでるところを見たら、慰めましょう。ただし彼の事を悪く言ったりするのは無しです！
箒さんはそう言った陰口を人一倍嫌うタイプなので、「アイツも悪気は無いんだよ」程度に抑えましょう。

彼女の好感度が高ければ、臨海学校での「白と赤」イベントで変化が生じ、「福音襲来」が「飛翔せぬ赤」へと変化し、ワンサマー君とあなたが出撃する事になります。そうなれば箒ルートに突入したと思って頂いても可です。

イベント名

「一夏と私」

条件：教室で、箒に一夏との関係についてアドバイスしている。

発生場所：屋上

内容：たまたま屋上へ行くと、物憂げな表情を浮かべている箒の姿が…………。

「…………一夏は何故、私の事に気づいてくれないんだろうか」

「白と赤」

条件：無し（ただし、好感度が高いと後のイベントで変化あり）

発生場所：海岸

内容：専用機持ちでないにも関わらず、何故か箒の姿もそこにある。そこへ現れたのは…………。

「これが箒ちゃんへのプレゼントだよ！ 箒ちゃんだけの専用機、その名も“赤椿”！」

「飛翔せぬ赤」

条件：箒の好感度が一定値以上。「福音襲来」の代わりに発生

発生場所：司令室

内容：束の打ち出した作戦は“白式”と“赤椿”の高度な連携戦。しかし箒は…………。

「私は…………参加、出来ません。私に“赤椿”を使いこなすだけの技量は、ありません」

セシリア・オルコット：難易度：極低

1番攻略しやすい人です。チヨロイです。

序盤の「代表候補生？」は好きに答えても大丈夫です。ただし、必須イベントの「クラス代表」では、推薦されても断つたりせず、セシリアさんの挑発にも答えましょう。下手に逃げてもいい事はありませんから。

クラス代表決定戦では、必ずワンサマー君より先にセシリアさんと戦いましょう。BT攻撃は厄介ですが、攻撃力は大した事無いので強力な攻撃で一気に落としてしましましょう。

代表決定戦で彼女に勝ち「ノブレスオブリージュ」が発生すれば、ほぼ問題ありませんが、他のヒロインの高感度を高めすぎると、「捻れる想い」が発生し、ヤンデレルートに突入してしまうため、注意しましょう。

「代表候補生？」

条件：無し（必須イベント）

発生場所：1年1組教室

内容：一夏の勉強を見てみると、そこへ近づく影が1人……………。

「わたくしを知らないっ!? このセシリア・オルコットを……………代表候補生にして、入試主席のこのわたくしをつっ!」

「クラス代表」

条件：無し（必須イベント）

発生場所：1年1組教室

内容：授業が開始するも、千冬が語り出したのはクラス代表についてだった。

「…………… ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

「ノブレスオブリージュ」

条件：代表決定戦でセシリアに勝利している。

発生場所：学生寮・セシリアの部屋

内容：敗北。それはセシリア・オルコットに大きな変化をもたらす。

「本当の、誇り……………」

「捻れる想い」

条件：セシリアの好感度が1位の状態で、他ヒロインの好感度が一定以上になる。

発生場所：1年1組教室

内容：のほほんさん達と談笑していると、誰かの視線を感じる。それはセシリアの物だったが、いつになく視線が厳しくて……………。

「…………… 誰にでも優しいんですね。いえ、それがあなたの美点なのでしょうが」

鳳鈴音：難易度：中

具体的な攻略法は篤さんと変わりません。鈍感さに悩んでるのを慰めたりして、地道に高感度を高めていきましょう。

ただし、彼女が転入した翌晩に起きる「酢豚の約束」が見落としがちになってしまうため、注意しましょう。ワンサマー君を下手に擁護したりせず、彼女の愚痴を聞いて胸を貸してあげましょう。

「無人機襲来」では彼女が撃墜されてしまう事はまずありませんが、注意すべきは「黒い雨」イベント。ラウラとは相性が悪いため、1ターン放置しただけで大ダメージを負ってしまいます。直前の移動イベントでは可能な限りアリーナに移動するよう心掛ければ、ダメージを抑えつつ救援に行く事が出来るはずです。

タッグマッチのパートナーで、彼女からパートナー指命を受ければ、鈴ルート突入です。

注意すべきはセシリアさん同様、他のヒロインの高感度を高めすぎるとヤンデレルートに突入してしまいます。特にシャルロットと仲良くし過ぎた場合に発生する「愛と憎しみは表裏一体」が起きてしまうと、すぐにヤンデレ化してしまいますので、ご注意ください。

「酢豚の約束」

条件：鈴の好感度が1位だと発生

発生場所：学生寮・1F廊下

内容：たまたま寮の廊下を歩いていると、走り去る鈴とすれ違う。気になって後を追うと……？

「……………アイツにとって、あたしなんてその程度の女だったのかな」

「愛と憎しみは表裏一体」

条件：鈴の好感度が1位の状態から、シャルロットの好感度が2位になる。

発生場所：学生寮・玄関

内容：買い物から戻ると、寮で鈴が出迎える。しかし、その瞳はどこか濁っていて……………。

「……………ねえ、どこに行ってたの？　ねえ、答えてよ。ねえ、ねえ！…！」

シャルロット・デュノア…難易度：高

ワンサマー君のルームメイトなので、なかなか隙を見せてくれません。

「シャルル・デュノア」時は高感度が高まった際のリアクションが無いため、分かりづらいかもしれませんが、見えただけで高まっています。

彼女の攻略には、まず彼女の正体を明らかにするところから始まります。彼女が転入してきたら、すぐに高感度を高めたり、積極的に話したりする事を心掛けましょう。ワンサマー君が先に彼女の正体に気づいてしまったら、攻略は失敗してしまいます。

「その名が示すもの」で彼女の正体が明らかになっても、まだ攻略は終わってません。タッグマッチ後の「新たな日常」が起きるまで、ワンサマー君に正体を気づかれないよう、彼女をサポートする必要があります。

があります。

また、再転入イベントが終わっても注意が必要です。彼女のヤンデレゲージは1番溜まりやすく、少しでも他のヒロインと仲良くなるとヤンデレ化してしまいます。さらに彼女がヤンデレ化したら、強制的に「マリオネット」が発生し、DEAD ENDに直行してしまつたため、その時はご愁傷様です。

「その名が示すもの」

条件：シャルル（シャルロット）の好感度が1位

発生場所：学生寮・自室

内容：たまたまシャルルに部屋の風呂を貸す事に。しかし、妙に長風呂なのが気になって覗いてみると……………。

「……………うん、見られたから分かると思うけど、僕は女」

「新たな日常」

条件：無し（必須イベント）

発生場所：1年1組教室

内容：山田先生によると、また転校生が来るらしい。しかもそれは……………。

「えっと、シャルル・デュノア改め、シャルロット・デュノアです」

「マリオネット」

条件：シャルロットの好感度が1位の状態で、他ヒロインの好感度が一定値以上になる。

発生場所：学生寮・自室

内容：部屋に戻ると、そこにはシャルロットの姿が。何故ここにいるのかを尋ねようとすると……。

「だからね、僕考えたんだ。どうやってたら君を独り占めできるかって」

ラウラ・ボーデヴィツヒ…難易度：高

彼女もシャルロットさんとは違った意味で攻略が難しいです。

大事なのは、ワンサマー君の味方をしない事。また、「銀色の転校生」で平手打ちを避けたり、反撃したりしない事。

最初の方は話しかけても邪険にあしらわれたりする事が多いです。

あまり何度も話しかけると高感度が下がってしまうため、話しかけすぎずにしましょう。

「黒い雨」では彼女の味方をしたりせず、千冬さんが乗り込んでくるまで事態を静観しましょう。戦闘後の「黒ウサギの誇り」でラウラさんの質問にうまく答えれば、タッグマッチで彼女とパートナーになる事が出来ます。

タッグマッチで彼女が撃墜されると「ヴァルキリートレース」が発生し、VTラウラとの強制戦闘が発生します。ワンサマー君が撃墜されていなければ、味方NPCとして彼女を積極的に攻撃しようとしてしまうので、タッグマッチではなるべく彼を早めに撃墜してお

きましよう。VTラウラのHPを10%以下にすると「シンクロ」が発生し、戦闘パートは終了します。
もし彼女のルートに突入しているのなら、翌日の「新たな日常」のイベント内容が変化します。

「銀色の転校生」

条件：無し（必須イベント）

発生場所：1年1組教室

内容：転校生ラウラ・ボーデヴィツヒ。彼女からは容赦なく平手打ちが叩き込まれ……

「……………わ、私は認めない！ お前が教官の弟なんて……………笑うな！」

「黒い雨」

条件：無し（必須イベント）

発生場所：アリーナ

内容：セシリアと鈴の前に現れたラウラ。2人を挑発し、戦いを挑んでくる。

「ふん……………性能はまあまあだが、操縦者がこれではな」

「黒ウサギの誇り」

条件：1、「黒い雨」で行動していない。 2、ラウラの好感度が1位。

発生場所：ピット

内容：騒動を静観した後、ラウラから声をかけられる。
「簡単だ。貴様が1年の中で最も強い。ただそれだけだ」

「新たな日常」

条件：ラウラの好感度が1位で、「ヴァルキリートレース」でVT
ラウラのHPを10%以下にしている

発生場所：1年1組教室

内容：シャルロットが女性であるとカミングアウトした直後、現れたラウラに唇を奪われ……………。

「お、お前を私の嫁にする！ 意義は認めん！！」

織斑千冬…難易度：低

意外かもしれませんが、難易度はそこまで高くありません。

授業中の受け答えはしっかりして、優等生でいる事を心掛けてみましょう。

授業後や放課後に起きる手伝いイベントをこなせば、好感度も自然と高まっていきます。

「ブラコン？シスコン？」では、ワンサマー君を悪く言ったりせず、愚痴を聞く事に専念しましょう。選択を間違えてしまうと、部屋か

ら叩き出されてしまいます。

もしも、「黒い雨」時点で高感度が一定以上だったら「ブリュンヒルデ」が発生し、彼女のルートが確定します。「ブリュンヒルデ」が発生せずとも、攻略は十分に可能です。

臨海学校の「墜ちる白」では男としての真価が問われる事になります。男らしい態度で接する事が大切です。

「ブラコン？シスコン？」

条件：千冬的好感度が一定値以上

発生場所：学生寮・寮官室

内容：何故か泥酔した千冬の愚痴を聞く事に……………。

「お前の10分の1でも、あのバカに危機感があればな……………」

「ブリュンヒルデ」

条件：千冬的好感度が一定値以上、また「黒い雨」でセシリア・鈴に味方している

発生場所：ピット

内容：ラウラの暴挙を止めるも、千冬表情は冴えない。その理由を尋ねると……………？

「私は1番大切な事を、あれに教え損なった。……………教師失格もいところだ」

「墜ちる白」

条件：千冬的好感度が1位。「銀の福音（1回目）」で一夏が撃墜

されている。

発生場所：旅館

内容：ただ1人佇む千冬。その顔にはいつもの覇気はない。心配して声をかけると……………。

「……………すまない。少しだけ、このままでいさせてくれ……………」

布仏本音：難易度：極低

チヨロいさん以外で攻略が簡単なキャラです。

普通に話して好感度を高めていけば、問題無くルートに入れます。ただし、後述する簪ルートでは注意が必要になる時があります。

「それは水着？」

条件：のほほんさんの好感度が一定値以上

発生場所：海岸

内容：それはどう見ても着ぐるみで、いつもの彼女と変わらなくて……………。

「……………実はちょっと暑いかも」

更識楯無：難易度：極高

今作では3番目に攻略が難しい相手です。

まず彼女の登場が新学期前だとランダムである事です。生徒会室、アリーナ、中庭にランダムで出現し、3回のランダムイベント「あれは誰？」をこなす事で、彼女と自由に接触できるようになります。アリーナで起きるランダムイベント「学園最強」では彼女との強制戦闘が発生します。1週目ではまず勝てません。HP50%以下にすればイベント発生で戦闘終了。高感度が上がります。

1番のミソは、彼女の好感度が一定以上で発生するランダムイベント「一夜の過ち」。発生確率は低いですが、発生すれば彼女のルートが確定します。

ただし、発生しない場合がほとんどですので、「新しい日常」後は彼女と簪さんの仲を取り持つ事に専念しましょう。

鈴さんが転入してくるまでに彼女と遭遇できなければ、攻略は諦めましょう。

「あれは誰？」

条件：ランダム

発生場所：生徒会室、アリーナ、中庭

内容：訪れる先で、扇子片手にこちらを見つめる女子生徒の姿が…

……。
「ふふふ。また会いましょ」

「学園最強」

条件：楯無と知り合っている事が前提。その上でランダム。

発生場所：アリーナ

内容：IS学園生徒会長は学園最強の証。最強という名に惹かれ、彼女と戦う事に……………。

「おねーさんも久々に本気出しちゃった」

「一夜の過ち」

条件：楯無の好感度が一定値以上。その上でランダム。

発生場所：自室

内容：何故か部屋にやって来て、妹や一夏の事で愚痴る楯無。いつしか酒が回り、そして……………。

「すっごく激しくて……………私、壊れちゃうかと思っちゃった」

更識簪：難易度：極高

今作では2番目に攻略が難しい相手です。楯無さんを攻略後に解放されます。

比較的簡単に遭遇できますが、好感度が上がるようになるのは「生徒会長の頼み事」か「のほほんさんのお願い」が起きてからです。後者ならともかく、前者は前述したランダムイベントで楯無さんと遭遇していなければ発生しないイベントで、発生確率は極めて難しいです。そのため後者のイベントを発生させるのが1番ですが、のほほんさんの好感度を高めすぎると彼女のルートに突入してしまうため、注意が必要です。

そして最大の難関となるのが「のほほんさんの頼み事」を発生させた場合にのみ起きる「最凶のシスコン」イベント。最後には楯無（天元突破）さんと戦わなければなりません。ある意味彼女がラスボスなので、死ぬ気で戦いましょう。HPが30%以下になると「ド根性」が3回かかり、4回目には「魂」「ひらめき」「集中」「鉄壁」「不屈」がかかります。

「生徒会長の頼み事」

条件：楯無、簪と知り合っている

発生場所：生徒会室

内容：楯無の呼び出しを受け、生徒会室へと赴く。いつになく真剣な顔の彼女の頼み事とは……………？

「お願い！ おねーさんのお願い聞いてくれたら、何でも好きな事してあげるから！」

「のほほんさんのお願い」

条件：のほほんさんの好感度が一定値以上

発生場所：1年1組教室

内容：どことなく真剣っぽいのほほんさん。そんな彼女のお願いは……………？

「簪ちゃんって言うんだけどね、ちょっと色々あって専用機が無くて」

「最凶のシスコン？」

条件：1、のほほんさんのお願い」を発生させている。 2、簪の好感度が一定値以上

発生場所：生徒会室

内容：簪がうまくやっている事を嬉しく思いつつも、寂しさを憶える楯無だったが……………。

「……………最近、お姉ちゃんが怖いような気がする」

「最凶のシスコン？」

条件：「最凶のシスコン？」を発生させている。

発生場所：廊下

内容：楯無の様子がおかしい事を虚から聞いてしまう。さすがに変な事はしでかさないと思うが……………。

「とにかく、今の会長には気をつけてください。正直なところ、何をしでかすかわかりません」

「最凶のシスコン？」

条件：「最凶のシスコン？」を発生させている。

発生場所：生徒会室

内容：生徒会室へ呼び出され、楯無に簪との仲を問い詰められる。
そこへ簪が現れ……………。

「私は、私の意志で好きになったの……………だから、私の「好き」を否定しないで……………！」

「最凶のシスコン？」

条件：「最凶のシスコン？」を発生させている。

発生場所：中庭

内容：簪の拒絶に打ちのめされた楯無だったが、憤怒やら嫉妬やらの感情が爆発し、彼女の戦闘力が天元突破する……………！

「ころ、して、あげ、る」

篠ノ之束：難易度：極高

今作で1番攻略が難しい相手です。彼女以外の全ヒロインのルート
を攻略して、解放されます。

まず専念すべきは、臨海学校まで他のヒロインの好感度を高めすぎ
ない事です。好感度を抑えつつ臨海学校に突入すれば、攻略の糸口

が見えます。

「福音襲来」では、密漁船が発見されるより前に福音を撃墜しましょう。撃墜出来なければ「墜ちる白」が発生してしまい、彼女の攻略が失敗してしまいます。撃墜に成功すると、「しろきし・しろき」での千冬と束の会話が変化します。

夏休みでは、他のヒロインから誘いを受けても断り、街を散策しましょう。ランダムで束さんが登場し、「世界は束さんを中心に回っている！」で拉致されます。拉致イベント後の無人機戦は負けたら即ゲームオーバーです。代表戦で戦った時よりも数段強化されており、その上複数登場するので注意しましょう。

また彼女のルートでは、学園祭でのアラクネとの戦闘に、味方増援が出現しません。

「しろきし・しろきし」

条件：1、「銀の福音（1回目）」を撃墜している。 2、「夏が撃墜されていない。

発生場所：海岸

内容：“銀の福音”の撃墜。それは束にとっても予想外の状況であり…………。

「……………邪魔だよねー、あれ」

「世界は束さんを中心に回っている！」

条件：1、束以外のヒロインの好感度が一定値以下。 2、「銀の福音（1回目）」を撃墜している。

発生場所：街

内容：ふと、街をぶらぶらしていると、見覚えのある耳が地面から

生えているのを見つけてしまい……………。

「単刀直入に言っちゃうと、東さんは君を拉致りに来ました。いえい！」

五反田蘭：難易度：高

隠しキャラです。もしかしたら攻略できる事を知ってる人は少ないかもです。

最初からワンサマー君に惚れてる状態ですし、なかなか接点が無いため、彼女と接触できるタイミングを逃さないよう気をつけましょう。

大切なのは、必ずワンサマー君に付き合って五反田食堂へ行く事。途中、部屋から出る選択肢が出現しますが、部屋を出ると蘭さんに遭遇できます。

彼女の攻略で1番のミスになるのは「蘭の相談？」。彼女の相談には真面目に対応しましょう。また、ワンサマー君と接触させる選択肢もなるべく控えるのもコツです。

「蘭の相談？」

条件：一夏に付き合って五反田食堂へ来ている。

発生場所：五反田家・廊下

内容：弾の部屋から出ると、たまたま知らない女の子と遭遇する。五反田蘭と名乗った彼女は質問をぶつけてくるが……………。

「あの、一夏さんって誰か特定の女の人と付き合ったりとかしてますか？」

「蘭の相談？」

条件：1、蘭の相談？」を発生させている。 2、他ヒロインの好感度が一定値以下。

発生場所：篠ノ之神社

内容：神社にて、浴衣姿の蘭と遭遇する。そんな彼女はある相談を持ちかける。

「それでもやっぱり、あの人の事好きですから」

「ラッキースケベ」

条件：必須イベント（ただし、「蘭の相談？」を発生させていると変化あり）

発生場所：篠ノ之神社

内容：蘭と一緒に境内へと戻ってくると、そこには一夏と箒の姿があっただが……………。

「……………一夏さん、最低です」

「蘭の相談？」

条件：「蘭の相談？」、「ラッキースケベ」を発生させている。

発生場所：廊下

内容：学園祭でたまたま蘭と遭遇し、再び相談を持ちかけられる。ただ、今回は蘭の様子が少し違って……。。

「ええ。しっかり考えて、それで決めました。一夏さんの事とは関係無しに」

更識姉妹：難易度：多分兄さん以外には無理

別名「更識姉妹井ルート」。

全ヒロインの中で、更識姉妹の好感度が高い場合にのみ突入。

具体的に内容を説明すると「一夜の過ち」の時に、簪さんが乱入。

2人纏めて美味しく頂いてました。

見てて1番「リア充爆発しろ」と思いたくなる展開でしたね。

番外編：玲夜ちゃんのヒロイン攻略表（IS編）（後書き）

これらは全て、兄さんが実際にやった事を基に（作者がお遊びで作成しました）。

もし好評だったら、また考えてみます。

第3話：チャットと友人と中国と（前書き）

以前凍結した「BAD ENDから始まるストーリー」前に書いていたいくつかの没話を読み直し、その上で大幅に設定を変えてみたら面白い事になった。
もしかしたら、またネタ倉庫に投稿するかもしれませんが、期待せずにお待ちください。

第3話：チャットと友人と中国と

基本的に、織斑一夏は重要人物である。

世界最凶……じゃなく、世界最強の座に君臨した織斑千冬の実弟であり、3年前は誘拐までされてしまっている。

そのため、政府からそれとなく監視が付いているであろう事は、それなりに想定はしていた。……まあ、競馬云々でお金稼いだりしてるのは多めに見てもらえるだろうと思っていた。

「……………今日も見張られてるな」

「一夏、何か言った？」

「いや、何でも」

隣でラーメンを啜る鈴にそう返し、焼きそばパンにかじりつく。

これでもガチで危険な世界（トリコとかH×Hとか）にいた事がある。あそこで鍛えられた気配察知能力は、コツさえ掴めば使えるようにはなる。

そんな気配察知によって、自分を見張っているであろう人間の数くらいは把握できる。

……………まあ、ちょっとタチの悪い護衛みたいなものなので、そこま

で敏感になる必要は無いだろう。

そう考えて、コーヒー牛乳に手を伸ばした。

「そう言えばさ、千冬さん戻って来たんだっけ？」

「ん？ ああ。でもすぐどっか行ったけどな」

当人はひた隠しにしているが、一夏には彼女の仕事先がIS学園である事くらい分かっていた。

競馬や競輪など、賭博で稼いだ金を使い、ようやく裏社会の情報網に手を伸ばす事が出来たので、軽く織斑千冬についても調べてみたのだ。

さすがは裏社会。さすがにプライベートまでは分からなかったが、彼女が現在IS学園でどんな事を教えているか。ドイツでどんな教導を行ったかまで事細かに調べられた。

……………こう細かいと、自分の事が少し心配になってくるので、今後はなるべく気をつけよう。

「正直、千冬姉は生活力ゼロだから心配なだけだな」

一夏がそう呟くと、その意味を理解したのか、鈴も苦笑する。

その言葉通り、千冬の生活力はほぼ皆無。料理はギリギリ出来るが、掃除洗濯など家事のスキルは無いに等しい。

寮長なんてやってるらしいが、彼女の部屋の具合が心配でならない。部屋の掃除なんて自分からするような人じゃないので、きっと恐ろしい事になっているに違いない（同僚が顔を引き攣らせるくらいには）。

(……………迷惑かけてないといいな)

「織斑先生、いらっしやいますか……………って、何ですかこれ!？」

「む、や、山田君か。どうした?」

「どうした、じゃありませんよ! この惨状は何ですか、何があったんですか!？」

「いや、これはだな……………」

「まさか、何者かの襲撃？ となると一大事ですね……………すぐに他の人呼んできます！」

「ちょ、ちょっと待て山田君！ 話を聞け！」

「……………」

軽く想像してみて、目眩がした。

いかん、リアルにあり得る。

イメージ的には「何事も完璧にこなす超人」な千冬が、私生活がだらしないという想像に行き着かず、他の人に誤解される様。

……………とりあえず、簡単な整理法くらいは教えておくべきかもしれない。

あくまでも苦手なだけで、出来ないわけではないのだから。

篠ノ之箒は友達が少ない。

そんな風に感じられる事があるかもしれないけど、そんな事はない。

しつかり剣道部には頼れる友人がいるし、最近始めたインターネットでも友人が出来た。

「お、来てる来てる……………」

パソコンをカタカタやっていると、チャットにコメントが書き込まれた。

ハンドルネーム『バレッタ』さん。アニメ・ゲーム関連に深い造詣の持ち主らしく、私ともガンダムについて熱く語り合った事がある。

……たま〜にある事なんですが、転生した世界に他の世界のお話……つまり、この世界だとガンダムみたいに、そーゆーのがあるんですよね〜。

当然、SEEDにはいませんでしたが（当たり前だ）。

バレッタ：もうすぐ高校進学ですが、ブルームさんは進路を決めていますか？

うーん、進路ですか……どのみち私は監視云々でIS学園行きですし……。

あ、ブルームって言うのは私のハンドルネームです。単純に簿を英語読みただけですね。

ブルーム：諸事情からIS学園を受験する事になっています。

それ自体は特に話しても問題ないので、とりあえずそう答える。

すると、バレッタさんからもこんな応答が……。

バレッタ：本当ですか？ 実は私もIS学園を受験するつもりなんです。奇遇ですね。

へへ、バレッタさんもIS学園かあ……。

これはこれで楽しみの予感がしてきた。

と、そこへ『ワンサマーさんが入室しました』と表示される。誰の事は分かるかと。

ワンサマー：こんばんは。随分盛り上がってるみたいですが、何の話をしてるんですか？

バレッタ：こんばんは。高校進学の話で、私はIS学園を受験するんですが、ブルームさんもIS学園を受験するって聞いたんです。

ふむ……………。

どうせなら巻き込んでやろうと思ひ、キーボードに指を走らせる。

ブルーム：ワンサマーさんはどこを受験するか決めていますか？

とは聞いてみたものの、因果律やら運命やらは、きつと彼をIS学園へ進ませるんだろう。

うちの姉が絡んでいないか怖くなるけども、とにかくそーゆー運命なのだ。

ワンサマー：自分は藍越学園を受験するつもりです。本当は中学を出たら就職しようと考えてたんですが、「高校には行け」と姉がうるさくて。

バレッタ：あれ？ ワンサマーさんにもお姉さんがいるんですか？

ワンサマー：ええ。外では完璧超人ですが、家ではアレです。だらしない事この上ないですね。

所謂、外キャラって奴ですね。

生活力が皆無に等しいと聞いていますが、実際に見たことは無いのでどのくらい分かりませんが。

バレッタ：……実は私にも1つ年上の姉がいるんですが、ワンサマーさんのお姉さんの様に、絵に描いたような完璧超人なんです。

へー、どこにでもいるんですね。完璧超人って。

うちの姉？ いえいえ、天災とバカは紙一重って言うでしょう？ あれはそういう類です。

ブルーム：いやいや、今時非の打ち所がない完璧人間なんていないでしょう。

ワンサマー：そうそう。何か1つくらい欠点を持つてははずです。

バレッタ：……………そう言えば、編み物が苦手だと聞いた事があるよ
うな。

ほら、やっぱり。

ワンサマー：多分ですが、バレッタさんのお姉さんはそういう欠点をひた隠しにしてるんじゃないでしょうか？ 自分のみつともない所をバレッタさんを含め、他の人には見せたくないから、完璧超人のように振る舞っているのでは？

おお、さすがは一夏。

まあ、千冬さんがソーユータイプですからね。あの人、外キャラと内キャラのギャップが激しいですよ。崇拜者が見たら卒倒しかねませんね。

バレッタ：そうかもしれませんが。今度、もう少し姉について調べてみます。

うんうん、そうした方がいいですよ。

バレッタさんが納得したところで、彼女はそのまま退室し、そのチャット部屋には私と一夏だけが残された。

さて、そろそろ本題に入るとしますか。

ワンサマー：で、そっちの様子はどうなんだ？

ブルーム：順調です。少なくともIS学園には問題無く進学出来ます。

元々、決められていたようなものですからね。

試験勉強もしっかりしてますし、ISの稼働についても問題無い。

……強いて言うなら、やっぱり普通の訓練機じゃ反応が鈍いくらいでしょう。

ブルーム：そっちはどうなんです？ 転生者はいたんですか？

ワンサマー：……いたには、いた。フランスの代表候補生、エルトナ・ハーミットだ。

妙に歯切れの悪い返答に、少し首をかしげる。

『いる『ではなく』いた』？

ワンサマー：エルトナ・ハーミットだが、模擬戦中に再起不能にされている。相手はフランス代表だ。

フランス代表って………それ、シスターリフィリスですか!?

今現在、IS操縦者では織斑千冬と並ぶネームバリューを持つであろう人物。それが“シスターリフィリス”ことリフィリス・シャミナード。現フランスの国家代表だ。

転生者というとみんな段違いの能力ですからねえ………でも稀に、そんな転生者をも素で凌駕するバグみたいな人間がいるんです。分かりやすく言うと、東方 敗とか、ジャツ ・ラカンとか。

シスターリフィリスもそんな1人。間違いなくこの世界において、最強に近い存在。

正直、2人目のブリュンヒルデに選ばれてもおおかしくない実力者。千冬さんでさえ勝てるか分からない相手ですし。

ブルーム：彼女が転生者だという可能性は？

ワンサマー：無い。調べてはみたが、彼女の生い立ちや境遇にはそれらしき痕跡は無かった。

その結果を喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか………。

あ、そうそう。私の近くにも転生者らしき人がいるんですけど、どうします？

ワンサマー：どんな奴だ？

ブルーム：うちの姉の数百倍うざったい奴です。

半年ほど前にうちの学校へ転校してきた人なのですが、妙に馴れ馴れしい。

最初は剣道関連のファンかと思ったんですが、たまたま「やっぱり一夏は邪魔よね」っていう独り言を聞いて、転生者だと確信。しかも百合ハーレム狙いの危ない人。正直、私が1番嫌いなタイプ。

あの分だと、IS学園を受験しそうで嫌なのですが。

ワンサマー：まあ、IS学園はそこまで敷居は低くない。付け焼き刃で突破できるような関門じゃあないから、多分大丈夫じゃないか？

そうなんですよねえ……………IS学園の倍率、どれだけか知ってます？

何千人受験して、4分の3以上が最初の書類審査やIS適性で落とされて、さらにその半分がペーパーテストでふるいにかけられる。そしてそれでも勝ち残った人だけが実技試験に臨む事ができ、実技である程度の能力を示した者だけがIS学園への入学を許される。

いくら強い力を持っていたとしても、ISの適性と最低限の知識が無ければ突破できない。それがIS学園だ。

生半可な覚悟では、到底進学など出来やしない。

「とはいえ、来る人は来るんでしょうけど」

そう呟きながらも、若干痛む頭を押さえつつも画面に集中する。

例えば、一夏と同じような例外。男性操縦者なら、普通に保護の名目でIS学園に放り込まれたりするので注意が必要になる。

ぶっ殺せれば一番楽なんですけど、さすがに表立って殺っちゃうと面倒な事になりかねませんし……………。

ワンサマー：我慢しろ。余程しつこかったら、周囲の人間を味方に付ける。そうすれば利はこっちにある。

わかってますよ〜。

そして中学2年から3年へ進級するという時。

鈴が家庭内の事情で中国へ戻る事になった。

「……………そうか。おじさんとおばさんが」

その理由は、両親の離婚。

もちろん夫婦仲が冷え込んだというわけではなく、原因は鈴の将来にある。

「簡易適性でA判定か。確かにおばさんがIS業界に進めたがるのは分かるな」

「うん……………」

現代社会、なんだかんだ言っても、ISが主流で世界が動いている。

おばさんが言うように、鈴のように高いIS適正値を持つ人間なら、代表候補生にだって選ばれる可能性がある。そうならば将来安泰だ。

ただ、おじさんが言ってる事も正しい。

ISはスポーツ競技に用いられるが、それ以前に兵器である。

軍ではごく普通に実戦に投入されており、その道に進んだ鈴もそうなるかもしれないし、危険が付きまとう事にもなる。

子供の将来と安全。どちらも親として正しい考えだろう。

「ほら、父さんも母さんも頑固だから、もうずっと話が平行線で、結局離婚だって」

鈴の国籍は中国にある。だから、IS関連の道を進むためには一旦帰国しなければならない。

そのため、引越さざるを得なくなった、というわけだ。

「……………寂しく、なるな」

「……………」

少しの間、沈黙が続いた。

ふと、意を決したように鈴が俺を見つめ、口を開く。

「ねえ、一夏」

「うん？」

「もし……もしだけど、次に会った時、あたしの料理が上達してたら……」

どこか緊張しているように見える。

心なしか、鈴の顔が赤いようにも……？

「あたしの作った酢豚、毎日食べてくれる？」

……一瞬、言葉に詰まった。

いや、だって……なあ？

「……鈴、こういう場合は普通、酢豚じゃなくて味噌汁なんじゃないか？」

「うっ！ そ、そりゃあそうなんだけど……」

でも、酢豚に思い入れがあるのは分かる。

中国じゃ味噌汁なんて作らないし、家庭料理で分かりやすいものと

言えば酢豚。

俺が初めて食べた鈴の料理も、酢豚だったっけな。

「そ、それで……どうなのよ!」

あー、そうだよな。

鈴に対しては、確かに好意を抱いている。

だが、それが男女間の強い恋愛感情なのかと問われると頷けないのが現状だ。

どう答えるべきか。どこか期待するような表情で答えを待つ鈴に、俺は口を開いた。

「鈴、俺は

」

第4話・運命律は覆せない(前書き)

最初に言うておく……………。

クリスマス編は書けませんでした。ごめんなさい！

頑張つて「御狐様」の年末・お正月編は書こうと思ひますので、期待せず待つててください。

第4話：運命律は覆せない

『しよ、勝者、篠ノ之箒……………』

……………この程度、ですか。

ブレードを収納し、ピットへと向かう。

現在行われているのは、IS学園入学試験の実技試験。

代表候補生のような専用機持ちは専用機に搭乗する事が許されるが、大抵の受験生は学園側が用意した訓練機に乗る事になる。

もちろん、試験官も同じように訓練機で戦っただけでも……………大概は試験官に敗北する。

何せ年季が違う。IS学園の教員にはかつて代表候補生を務めた人間もいる。そんな相手と同じ機体で戦って、勝てる方が稀だ。

「ま、私は稀な方ですけど」

そう呟くと、装着していた『打鉄』を待機状態に戻す。

「お疲れ様です、篠ノ之さん。試験結果は後日発表しますので」

「はい、ありがとうございます」

ピットで控えていたスタッフに『打鉄』を渡しそう答えると、真っ直ぐに更衣室へと向かう。

更衣室に着いて、すぐISSスーツを脱ぐ。

脱いだと同時に今まで抑え込まれていた胸が大きく揺れる。……年齢に似合わない自分の胸にそっと触れる。

正直、邪魔くさい。

異性からは気持ち悪い視線で見られ、同性からはやっかみを受ける。

動けば擦れるし、激しく揺れると後で痛い。

剣道をする時は仕方なくサラシを巻いて、押し潰すような形で練習しているにも関わらず、未だに成長中というのが恐ろしい。

………こんなの、ここまで大きくなかったっていいのに。

「……………はあ」

ちょっとばかり憂鬱な気分になりつつも、シャワーを浴びる。

程よく温かさが全身を包み、流れていく。

……でもまあ、男を悦ばせるには大きい方が有利かもしれない。

あの人は……胸のあるなしを気にするタイプじゃないけども、やはり無いよりはあった方がいい。

出来るだけ物事を+になるように考え、シャワーを止める。

そう言えば、兄さんはどうするつもりなんだろう？

(うーん、ほとんど憶えてないのがキツイですね)

最初の方は原作知識というアドバンテージがあっただけども、さすがに何百年も転生者生活を送っていると、すっかり忘れてしまった。

憶えている事と言えば、織斑一夏が何かの騒動に巻き込まれてIS学園へ入る事になるくらいだ。

……まあ、あの兄さんの事だから「うっかり」というのはあり得ないと思うけど。

バスタオルで濡れた身体を拭きつつ、そんな事を考える。

制服に袖を通し、忘れ物がない事を確認してから更衣室を後にする。試験結果は後日発表される。とはいえ、私がIS学園に進学するのはある意味決定事項なので、発表をそこまで気にする必要は無いのだが。

後日、世界初の男性IS操縦者が発見されたというニュースが駆け巡り、よく知った顔がTVに映ってる事に、私は苦笑を禁じ得なかった。

運命律は覆せない。それが世界の原則だ。

例えば、ある物語で少年がある少女と出会った事で、非日常の世界へと足を踏み入れるというベタな展開があるとすると、

その場面に介入し、少年と少女が出会わないようにしたとしよう。

そうなった場合、物語は始まらない。そんな展開を元通りにしようとして、世界から修正力が働く。それとはまた違った形で、少年を非日常へと進ませようとするのだ。

すなわち、本来あるべき形へと強制的に戻そうとするわけである。

……で、だ。俺が何を言いたいかと言つと……。

(どうしてこうなった)

最早テンプレと化しているであろうそんな言葉を、ため息混じりに内心呟く。

……ああ、そうだよな。きちんと説明しないと分からないよな。

試験会場に到着した俺は、試験会場を間違える事なく中へ入り、ペーパーテストを受けた。その後、試験が終わつたらとつと帰ろうとしたんだが……。

「何であんなタイミングよく、ISを移動させてたりするんだよ」

IS学園の方の入試も終わったのか、待機状態のままISを移動させているところに出くわした。

興味が出て触ってみようかと思つたが、さすがに空気くらいは読む。

そんなわけですれ違う形で通路を進もうとしたんだが……何も無い場所であるにも関わらず、運んでいた教員らしき女性が転んだ。

反射的にその女性を受け止め、さらに宙を舞つたISをキャッチし

たところ…………。

何故かISが起動し、気がついたら装着していた。

…………騒ぎになったのは言わずもがな。

あれから数日経過したが、家の周囲には今もマスコミがたむろしており、下手に出歩けない。

『大変だよな、お前も』

報道当初は仰天していたらしい弾も、俺の様子を聞いてけらけら笑っていた。

……………今度会ったら、一発お見舞いしてやる事にしよう。

それは置いておくとして、とにかく現状は外を出歩けない。

学校やバイトにも行けない(幸い事情は分かってくれている)し、買い物にだって行けない(専ら買い物は通販になってしまう)。

……………下手すると、電話やネット回線までチェックされてそうで嫌だ。

「暇だ……………」

『織斑一夏はIS学園へ入学させる』

それが委員会の出した結論だった。

……まあ、私としてもその決定には思うところはあったが、それが現時点では最善の選択であると考えている。

国籍こそ日本だが、一夏はどこか特定の国に所属しているというわけではない。

つまり、立ち位置が曖昧なままでは、どこかの国に狙われる危険性がある。

そのため、絶対中立であるIS学園へ入学という名目で保護させる。そういう決定だ。

(……………最近、帰ってないな)

思えば、一夏の顔を最後に見たのはいつだっただろう。

久々に家へ帰ろうとしていた矢先にこれだ。おかげで私も拘束されて、まともにも外を出歩けなかった。

姉である私がこうなのだから、当事者である一夏も相当なはず。家にカンヅメにされているかもしれない。

「……………一夏」

静かに、小さく、弟の名前を呼ぶ。

3年前の誘拐事件。あの事件から、一夏は変わった。

頭を撃たれた一夏だが、目を覚ましてからはまるで別人のような印象を受ける。

何度も、本物の一夏はあの事件で殺されて別人が成り代わったんじゃないかと思った。

だが、何気なく見られる仕草や癖は、紛れも無く一夏のそれだ。

何より頭ではなく、私の感覚が「あれは一夏だ」と訴えている。

「織斑先生、どうかしたんですか？」

その声に振り向くと、そこには見知った顔があった。

水色の髪の女生徒が「妹最高」と書かれた扇子で口元を隠している。前々から気になってはいたが、なんなんだその扇子は。

……………コイツの名前は更識楯無。来年2年生にも関わらず、IS学園の生徒会長に成り上がった存在だ。

「どうしたんです？ 顔が凄い事になってますよ？」

……………本音を言うのだが、私はあまりコイツが好きじゃない。

更識の飄々とした態度が、どこかの誰かを思い起こさせる。あの人を食った態度のバカを……………。

「何でも無い。それより、何故お前がここにいる？」

既に下校時刻は過ぎている。生徒会関連で学校に残っているのなら納得出来るが……………。

「いえいえ。ちょっと織斑先生にお聞きしたい事がありました……………」

……………」

「……………なんだ」

瞬間、更識の纏っていた気配が変化する。

これまでの軽薄で親しみやすいそれが、一瞬で真剣なものへと変わった。

「織斑先生の弟さん……………織斑一夏くんについて、です」

……………どうやら、真剣な話らしいな。

更識家は国の裏側に関わる一族だ。私も詳しくは知らんが、対暗部用の暗部……………すなわちスパイへのカウンター的存在だという。

一夏の事を尋ねるのも、恐らくそれ関連だろう。

「……………うちの弟がどうした」

内心の僅かな緊張を晒す事なく、あくまで冷静に、態度を崩す事なく問い返す。

裏の事情関連で一夏の事を知りたいなら分かる。

だが、もしお前が一夏を害するといっているのであれば……………!!

「いえ、大した事じゃありません。どんな子かなと興味が出ただけです。」

「……………」

信用出来ない。

コイツは自他共に認める「人誑し」だ。どんな相手も自分のペースに持ち込み、惹き付ける。

ペースに乗せられたら負けだ。そう思い、気を引き締める。

「更識、これは教師として……………いや、あれの姉としての忠告だ。弟に深入りするのはよした方がいい」

「あら？ 珍しい言葉ですね」

実姉である私ですら、底知れぬ何かがアイツにはある。

お前如きの小娘がからかい半分で手を出せば、間違いなく何かロクでもない事が起きる。

「好奇心は猫をも殺すという。憶えておくといい」

「…………肝に銘じておきます」

そう短く答えると、更識は身を翻して去って行った。

まあ、私がああだこつだ言ったところで、素直に従う奴ではないんだが。

うーん、なんでこんな事になっちゃってるんだろな。

と、東さんは1人、テレビのニュースを見ながら呟くのでした。

「いつくん、だよね」

ここ数年はずっと会ってなかったけど、間違いない。

この分だと、IS学園に放り込まれそうだよね。まあ、いっくんなら大丈夫とは思っけど。

「……………そうそう、IS学園と言えば篝ちゃんもそうだったけ」

お姉ちゃんの所為で迷惑ばかりかけてるからね……………。

よし、誕生日プレゼントには、篝ちゃんの専用機を作って持ってってあげよう！

いっくんって無駄にモテるし、熾烈な恋のバトルに勝つには、やっぱり力が必要になる。きつと篝ちゃんだって喜んでくれるはず。

えーっと……………篝ちゃんの誕生日は、ちょうど臨海学校だったけ？
そんなような行事の日程を重ねるみたいだし……………。

「今からコア作るとなると……………うん、ギリギリ間に合うかな？」

篝ちゃんの入学試験の映像も（ハッキングで）見たけど、やっぱりあんな時代遅れの機体じゃ篝ちゃんの実力は出し切れてないね。

ここはやっぱり、篝ちゃん専用の機体を組み上げないと！

そうそう、それからいっくんの機体も用意しておかなきゃ。

いつくんの機体はやっぱりアレが1番だよな。なんたって、ちーちやんの弟なんだもん。

確かアレは………ああ、やっぱりあそこに放置されたままなんだ。じゃあ、束さんがちよいちよいと手を回して、いつくんに届くようにしておこう。

さすがにコアの情報は初期化されてるから、元通りの能力は発揮出来ないけど、やっぱりいつくんに相応しいものにはしないとね！

束さん、久しぶりに頑張っちゃおうよー！

第4話：運命律は覆せない（後書き）

以前投稿した「玲夜ちゃんのヒロイン攻略表（IS編）」
これについて考えてるのが、別作品の攻略表か、実際にあったイベ
ントがどんなものだったのか短編形式で出すというもの。

そこで皆さんにアンケートですが、

- 1 どんな作品の攻略表が見たいですか？
- 2 その作品の誰を陸斗に攻略して欲しいですか？
- 3 IS編でのイベントで、どのイベントが見たいですか？

遊び半分で苦笑しつつ、回答をお願いします。

番外編：陸斗君のIS学園ヒロイン攻略記（幕ルート）（前書き）

【簡単な登場人物紹介】

風峰陸斗

転生兄妹の兄。今作においては、転生云々の記憶や情報を封印されている。

IS開発に携わる妹・玲夜の影響で多少は専門用語を理解しているぐらい。

玲夜へ差し入れに行った際、たまたま研究施設にあったISに触れたところ起動させてしまい、それが広まった結果IS学園に放り込まれる。

戦闘技能は高く、ISの操縦に関しては天才的なセンスを見せる（なお、これは転生前に玲夜と“彼女”が面白がって、いくつか戦闘関係のスキルを付与したため）。

一夏とは対照的に、女性に対して包容力がある大人なタイプなので、人気を二分する事になる。また、ルートによっては非公式のファンクラブが作られる。

専用機は「神威参式」

風峰玲夜

転生兄妹の妹。今作において、記憶はしっかり保持している。

無駄に高い知能をIS開発に生かしており、陸斗の専用機である「神威参式」は彼女の作品。その気になればISコアを完全再現した代物も開発出来るが、さすがにそこまでして世界を乱したくないので手は出していない。

面白おかしくしたいという理由で、IS学園の陸斗達に色々とちょ

つかいを出す。なお、シャルロットのルートに入るには、彼女の協力が不可欠である。

ルートによっては一夏から想いを寄せられる事になるが、どんなルートでも容赦なく叩き斬っており、時に一夏にトラウマを植え付ける事に……………。

番外編：陸斗君のIS学園ヒロイン攻略記（幕ルート）

【一夏と私】

「……………風峰、ちょっといいか？」

授業が終わり、屈伸して凝りをほぐしていると、そう篠ノ之から声をかけられた。

「ここじゃダメか？」

「あ、いや、人目のある場所だと、少しな……………」

そう言いながらも、その視線はちらちらと特定の人物へと向けられている。

今もセシリアと会話している某ワンサマーへと。

……………ああ、そういう事が。

「分かった。屋上でいいか？」

「ああ」

そのまま屋上へと向かう。

幸い、屋上には誰の姿もない。ここでなら篠ノ之も気兼ねなく切り出せるだろう。

……まあ、だいたい何の話かは想像出来てるんだが。

「織斑の事、だろ？」

「……そうだ」

篠ノ之は深くため息を吐いた。

まあ、確かにあれの鈍感さは酷い。

ついこの前、鈴の「毎日私の作った酢豚を食べてくれる？」という約束を「奢ってくれる」という内容だと勘違いし、激怒させていたところだ。

「念のために聞くが……まったくダメか？」

「まったくダメだ。恐らく、あれは自分が好かれているという自覚その物が無い」

……あー、確かにそうかもしれない。

そりゃあ、俺だってあんまり人の事は言えない。そういうのは苦手だし、誰が誰の事を好きだとか、そーゆーのは分からない。

だが、織斑のアレは見ててイラツと来る。正直、次に何かあったらはっ倒したくなるかもしれない。

「もしかしたら、裸で迫るくらいいしないとダメかもしれないな」

「なっ……………そ、そんな事出来るか!!」

顔を真っ赤にして、そう怒鳴る篠ノ之。

……………いや、ダメだ。言っではみたが、裸で迫っても「風邪引くぞ、早く服着ろよ」とか言いそうだ。

「……………確かにあり得るな」

初日にあんな事しかしたからな……………と呟いている。

何をしたのかこの上なく気になるが、あまり触れない方がいい話題のようだ。

「まあ、地道に行くしかないんじゃないか？ 幸い嫌われてはいないし、部屋も一緒なんだから」

「そうだな………すまない、わざわざ相談に乗ってもらって
「いいって。気にすんな」

【飛翔せぬ赤】

「ちよーつと待った!」

話が纏まりかけた時、そんな場違いな声が響いた。

一同が視線を上へと移すと、そこにはウサミミ女の姿が。

ちなみに、織斑先生はかなり険しい顔をしている。正直、俺だって

言いたい。今すぐ帰れって。

「その作戦ちよつと待ったなんだな!!」

「山田先生、これの室外への強制退去を」

「は、はい。……えっと、篠ノ之博士、とりあえず降りてくれませんか？」

「とう!」

相手が相手なだけに遠慮がちな山田先生を無視し、篠ノ之博士は天井から飛び降り、華麗に着地する。

「ちーちゃんちーちゃん! もつといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティングー!!」

「作戦は既に決まっている。出て行け」

「聞いて聞いて! いつくんがこんな感じに作戦の要の時こそ! 紅椿の出番なんだよ!!」

あれ、蹴り出していいですよね?

視線で織斑先生に尋ねるけども、逆に視線で「待て」と言われる。

かなり苛立っているようだけど、とりあえず話だけでも聞いてみるらしい。

「いつくんの『零落白夜』！ これはエネルギーの消耗が大きいってデメリットがあるよね！」

「それがどうした」

「それをカバーする為に束さんはこれを開発したのだあー！！ ジヤジャーン、展開装甲を最大稼働させた際に行われる『絢爛舞踏』！！ こいつを使えば白式にエネルギーを供給できるんだよー！！」

その言葉に、俺たちは凍り付いた。

つまり、紅椿は最初から白式と組ませる事を前提とした機体である事を意味している。

確かにその『絢爛舞踏』を使えるなら、今回の作戦の成功率は格段に上がる。

……………尤も、本当にそれが使えるなら、の話だが。

「……………確かに、赤椿のスピードなら“銀の福音”にも追従出来る、か」

そう呟く織斑先生。

と、篠ノ之に向き直ると、静かに問いかける。

「篠ノ之。お前はどうか？ 作戦に参加出来るのか？」

「私は……………」

何か迷うように、悩むように、言おうか言わまいか、口を開きかけては閉じようとしている。

そんな篠ノ之の様子を、篠ノ之博士は何か期待するような目差しで見つめている。

ふと、篠ノ之の視線が俺へと向けられている事に気づいた。

「お前の思うようにすればいいんじゃないか？」

そう、言葉を投げかける。

ふっと篠ノ之の表情が柔らかくなった。

……………どうやら、迷いは晴れたらしい。俺の言葉くらいで晴れるとは思っていなかったが。

そして、織斑先生にまっすぐに向き直ると、口を開いた。

「私は……………参加、出来ません。私に赤椿を使いこなすだけの技量は、ありません」

その言葉に織斑先生は「そうか」と短く答えた。

他の面々も納得したように頷いている中、空気を読まずに不満そうな顔をしているのが1人……………。

「何でかな。篝ちゃんなら、すっかりきっかり赤椿乗りこなして力ツコ良く決められるよね？」

「……………姉さん」

そんな不満そうな篠ノ之博士とは対照的に、篠ノ之の表情は曇っている。

正直なところ、俺は安心している。篠ノ之がその判断が出来た事に稼働時間は2時間にも満たない。単一仕様能力である“絢爛舞踏”も、発動できるかさえ分からない。それに篝の技量も専用機を使いこなせるまでに高いと言いつらい。……………逆に足を引っ張る可能性だってあり得る。

「そこまでだ、束。……………私は篠ノ之を作戦に参加させるつもりは無いし、そもそも部外者のお前の意見を取り入れるつもりも無い」

「ちよつ、ちーちゃん!？」

「作戦は織斑と風峰の主体で行う。……………風峰、パッケージのインストールはどうなっている？」

「既に終わっています」

“神威参式”のパッケージは、臨海学校以前にインストールが終了している。

玲夜が色々とうるさかったからな……………なるべく早くデータ送ってくださいって。

だから前もってインストールだけは済ませていたが……………まさか、こんな形でデータを取る羽目になるとは思わなかったが。

「よし。では10分後に作戦を決行する。解散！」

織斑先生の言葉に、各々が自分の持ち場へと戻っていく。

俺も持ち場に着こうと思ったが、ふと篠ノ之に声をかけられた。

「……………風峰。その、すまない」

「何で謝る」

とは言ったが、その理由は分かる。

戦える力があるのに、戦いを避ける。戦いを拒んだ事を申し訳なく思っているんだろう。……………気にしなくていいのに。

ふう、とため息を吐きつつも、俺は口を開いた。

「戦場において、『戦わない事』も時には要求される。少なくとも俺は、お前の選択は間違っていないと思う」

「そ、そうか……………」

「だったら、これから頑張ればいいだろう？ あれを使いこなせるように」

確かに現時点の篠ノ之では、赤椿を使いこなすだけの技量は無い。

だが、決して篠ノ之の能力が低いわけでは無い。おそらく、同級生で代表候補生を除けば、トップクラスだと思う。

これからの修練次第では、十分に通用する能力を発揮出来る可能性だってある。

「……………ああ、そうだな」

オマケ【ヤンデレ編】

なんでこんな事になったのだろうか。

そう考えるとキリがないのだが、やはり考えてしまっ。

「……………風峰」

かなり不安そうな顔をした織斑先生が、そう尋ねてくる。

……………気持ちは分かりますし、気遣ってくれるのは嬉しいです。が、あまり近づかない方がいいですよ？ ぶっちゃけ、いつどこから狙

つてくるか分かりませんし。

「気にするな、大丈夫だ。……………それより、お前こそ大丈夫か？」

「ええ、まあ……………」

どこでこうなったのかと言うと、やっぱり臨海学校のあれこれが原因なんだろう。

あの日、篤は作戦には参加しなかった。否、最初は参加しなかった。

そりゃあ、専用機に乗って間もなく参加なんて無茶すぎる。とりあえず、俺と織斑で参加する事になったんだが……………失敗した。

と言うのも、作戦区域に密漁船を発見してしまい、織斑が福音そっちのけで密漁船を助けに回り作戦がメチャクチャ。さすがに織斑達を見殺しには出来ないため、已む無く俺もフォローに入ったが……………正直に言うと、織斑を庇って俺が墜ちた。

……………いや、本当にあの時は死ぬかと思った。あんな体験は2度とご免だ。

で、作戦なんだが……………結果だけ言うと、福音は大破。操縦者のナターシャ・ファイルスも重傷は負ったが、どうにか一命だけは取り留めたらしい。

え？　なんでそうなったか？　それなんだが……………。

「…………そろそろヤバいかもしれません。早めに戻ります」

「まあ、その……………なんだ。頑張れ」

時間的にもそろそろ限界のような気がする。

これ以上放置しておく、何をするか分からない。さらに、織斑先生と接していた時間が長ければ長いほど、どんな反応になるか怖い。

途中、すれ違う女生徒からは時折、気の毒なものを見る視線を向けられる。……………かなりキツイ。

そして、自分の部屋にたどり着くと、意を決してドアを開く。

「陸斗おー!!」

と、部屋の中から勢いよく誰かが飛び出してきた。

いつもの事なので、今回は倒れずに抱き留める。

「どこに行ってたんだ？ 遅いじゃないか」

「……………悪い。補習でちょっと遅くなった」

心配そうに見つめる篤に、そう優しく諭すように話しかける。

……ああ、分かってる。なんでこうなったか、だろ？

こうなった時、俺は撃墜されて海の中だったから、どんな様子だったかは知らない。

ただ、側にいた鈴の話だと、俺の撃墜を聞かされて真っ青になり、そのまま倒れかけた。そしてその後……みんなの制止も振り切って、単身“赤椿”で出撃した。

さすがに放つてはおけないと、鈴たちも出撃したが……彼女達が見たのは、篤が福音を圧倒している光景だった。……俺もその映像は見たが、正直信じられないものだった。

俺が救助されたのは戦闘終了後、ぷかぷか浮いてたのをたまたまシヤルロットが探知したのだが……。

「本当か？ 千冬さんに無理矢理じゃないか？」

「違うよ。ちょっと宿題出すの忘れてたから。あんまりその辺は気にするな」

依存。そう言っている状態だ。

俺が少しでも離れると、かんしゃくを起こす。

俺が少しでも異性と話していると、不機嫌になる。

俺が側にいなければ何をしでかすか分からないため、学園側も貴重な第4世代のIS操縦者を少しでも落ち着かせておくべく、急遽俺と篤を同室に押し込んだ。

……まあ、何をしでかすか分からないってのは賛成だから、分からなくもない。

『東さんも、さすがにこれは想定外だよ………』

織斑先生によると、そんな事を篠ノ之博士は言っていたらしい。それも珍しく、完全に困った顔で。

こうなってしまったのだから仕方がない。それに、俺は彼女を嫌っているわけでもないし、寧ろ好意を持っていると言っても過言では無い。

……とりあえず、過剰過ぎるスキンシップはやめさせるべきなのかもしれないが。

「じゃあ食事にしよう。今日もたっぷり作ったからな」

にこにこ笑いながら、部屋に入るよう催促する篤。

あれから変わった事として、必要以上に他人との接触を嫌がるよう

になった。

それまでは普通にコミュニケーションを取っていた鈴たちですら、接触するのを拒み、一夏に至っては強い拒絶を見せている。

そりゃあ、学校にはちゃんと出てるが、最近は俺以外と話してるところを見た覚えがない。

食事は専ら部屋で。それも二人つきり。………まあ、美味しいからいいんだけど。

「……………やれやれ」

番外編：陸斗君のIS学園ヒロイン攻略記（幕ルート）（後書き）

幕のヤンデレゲージが一定値以上の状態で「飛翔せぬ赤」を発生させ、尚かつ既定ターン以内に“銀の福音（1回目）”を撃墜出来なかった場合にのみ、ヤンデレルートに進みます。

なお、こっちの幕はヤンデレ補正がかかっており、ステータスが限界以上にまで強化（狂化）されています。

赤椿との相性も抜群。「亡国企業？ なにそれ美味しいの」とばかりに、オータムやマドカですら一蹴。

ただ、精神面では完全に陸斗に依存しており、ある意味束以上に狭い世界を再構築してしまっています。

彼女や千冬のように気丈に振る舞うキャラほど、1度その均衡が崩れると他者に依存しやすくなる。私はそんな風に思います。なので、千冬のヤンデレルートも似た感じですよ。

次は誰にしようかな。感想で来ていた更識姉妹をすべきか、千冬にすべきか……もうしばらくお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4164z/>

とある兄妹の連続転生物語～憑依編～

2011年12月29日15時50分発行